

希少種フジジガバチ（ハチ目：アナバチ科）の九州における生息環境について

河野太祐¹・山元宣征²

¹ 〒 890-0065 鹿児島市郡元 1-21-35 鹿児島大学理学部生物多様性学講座

² 〒 852-8021 長崎市城山町 11-30-301

はじめに

フジジガバチ *Ammophila atripes japonica* Kohl, 1906 (図 1-2) はアナバチ科の有剣ハチ目昆虫で、メスの体長は 30 mm 前後、オスではやや小型で 25 mm 前後である。メスは脚部と腹部第 1, 2 節の大部分が赤く（腹部第 3 節以降は淡い藍色金属光沢を帯びた黒色）、オスは全身が淡い藍色金属光沢を帯びた黒色であることから、日本国内に分布する同属他種から区別できる。日本中南部以南から琉球、朝鮮半島、東南アジア、オーストラリアにかけての広い範囲に分布するが、日本本土では、以前より分布が局所的で稀な種であり、近年の記録は少ない。また、土地開発による生息地の消滅などの理由によって、2013 年現在、福井県、埼玉県、東京都、神奈川県、高知県のレッドリストに掲載され、絶滅が危惧されている。

近年の九州におけるフジジガバチの分布記録は長崎・佐賀県にまたがる大野原（おおのぼる）高原と、鹿児島・宮崎県にまたがる沢原（さわら）高原の 2 か所に限られ（今坂, 2009；山元, 2011；長利・長利, 2012）、その分布は局所的であり、生息域を限定する何らかの要因があると考えられる。

ここでは、両生息地の環境と、筆者らが生息地で観察した本種の生態的知見について報告し、本種の減少理由についても若干の考察を行う。

調査地と調査方法

大野原高原は長崎県東彼杵町と佐賀県嬉野町にまたがって広がる標高 400-500 m に位置する草原地帯であり、次に述べる沢原高原と同様に自衛隊の演習地で、早春に野焼きが行われ、草原環境が維持されている（図 3）。大野原高原は今坂（2009）によってフジジガバチの生息が確認され、山元（2011）によって追加の記録が報告されており、これまでのところ北部九州における唯一の生息地である。

沢原高原は鹿児島県湧水町と宮崎県えびの市にまたがって広がり、栗野岳の北西、標高 500-600 m に位置する草原地帯である。同地は自衛隊の演習地であり、毎年早春におこなわれる野焼きによって遷移が進まず、草原環境が維持されている。沢原高原は長利・長利（2012）によって霧島における採集記録（長瀬, 1982）以来、約 30 年ぶりにフジジガバチの生息が確認された場所であり、南部九州における唯一の生息地である。

大野原高原と沢原高原の昆虫相は互いに類似しており、全国に数か所のみのおオウラギンヒョウモンの生息地であるとともに、ヒトツメアオゴミムシやホソハンミョウ、セグロイナゴ（セグロバタ）に代表される草原性の希少な昆虫類の生息地として知られている（今坂, 2009；青崎, 2010a-b；山下, 2011）。

今回の調査で得られた標本は各採集者の個人

Kawano, T. and N. Yamamoto. 2013. Notes on habitats of a rare species, *Ammophila atripes japonica* Kohl (Hymenoptera: Sphecidae) in Kyushu, Japan. *Nature of Kagoshima* 39: 109-111.

✉ TK: c/o Prof. Seiki Yamane, Department of Earth and Environmental Sciences, Kagoshima University, 1-21-35 Korimoto, Kagoshima 890-0065, Japan (e-mail: pseudoidatenankafu@gmail.com).



図1. 沢原高原産フジジガバチ *Ammophila atripes japonica*, ♀.



図2. 沢原高原産フジジガバチ *Ammophila atripes japonica*, ♂.

コレクションに保管されているが、河野が採集した標本の一部は鹿児島大学理学部の山根正気コレクションに寄贈された。

■ 結果と考察

標本 鹿児島県始良郡湧水町・宮崎県えびの市沢原高原；1♂1♀, 18 Sep. 2010；5♂2♀, 10 July 2011；河野太祐観察・採集。長崎県東彼杵町大野原高原；2♀, 16 July 2010；米田洋斗採集；2♀, 27 Aug. 2011；2♀, 10 Sep. 2011；1♀, 1 Sep. 2012；1♀, 12 Sep. 2012；山元宣征採集。

筆者らの観察では、両生息地において上記の個体以外にも、草本に訪花する個体や、地上を低く飛行する個体などが多数観察されたほか、大野原ではマルバハギやオミナエシを訪花する個体も観察された(図4)。

野焼きによって草丈が低く維持された環境は地表に多くの光が届き、草丈の多様な低い草本が



図3. 夏の大野原高原 (2010年7月7日)。



図4. マルバハギを訪れるフジジガバチ♀ (大野原高原 2011年9月10日)。

生育する。このような環境には、吸蜜原となるオミナエシやマルバハギなどが多く、フジジガバチの営巣場所に適した砂利混じりの裸地が多く見られる。また、本種の獲物である鱗翅目昆虫の幼虫の種類、数も豊富であると考えられる(福田, 2012)。フジジガバチはこのようにさまざまな資源が豊富な野焼き草原を生息地として利用する草原性の昆虫であると考えられる。かつてこのような野焼き草原は、採草地として各地に普遍的にみられたが、農業様式の変化によって急激に数を減らしている。それにともない、フジジガバチを含めた多くの草原性の昆虫の生息地が消滅し、定期的に野焼きがおこなわれる自衛隊の演習地のような環境がこれらの昆虫類の重要な生息場所になっているのではないと思われる。

今回報告した生息地は、フジジガバチだけではなく全国的にみても多くの希少な草原性の動植物の貴重な生息地であり、草原生態系の総合的な

保全が必要である。幸い、両生息地はともに自衛隊の演習地であるため、土地開発による生息地の消滅の危険性は少ないが、野焼きによってフジジガバチの生息が維持されている可能性があり、今後の生息地の維持管理の方法が重要かもしれない。また、本種を良好な草原環境を示す標徴種として各自治体のレッドデータブックに掲載し、一般や関係者への周知を図ることも必要であろう。

さらには、今回触れた二つの生息地において生態的観察をおこない、フジジガバチが大規模な草原環境を好む理由をさらにあきらかにする必要がある。また、観察によって得られた情報をもとに、フジジガバチの新たな生息地の探索と発見が望まれる。大分県の日出生台（ひじゅうだい）は毎年野焼きが行われる自衛隊の演習地であり、環境が大野原高原や沢原高原と類似しているため、フジジガバチ生息の可能性が高そうである。また、多くの草原性の昆虫の生息地として知られている熊本・大分県の阿蘇・九重地方や、福岡県北九州市の平尾台にも大規模な野焼き草原が残されており、新たなフジジガバチの生息地が発見される可能性がある。

■ 謝辞

この報文をまとめるにあたり、米田洋斗氏（九州大学農学部）、長利京美・貴大氏（鹿児島市）には採集情報を提供していただき、今坂正一氏（久留米市）には文献の入手に関してお世話になった。また、神奈川県立生命の星・地球博物館の渡辺恭平氏には本報文の草稿に目を通していただき、内容に関して有益なご意見をいただいた。心より感謝申し上げる。

■ 引用文献

- 青崎幸夫, 2010a. 沢原高原トラップ採集. SATSUMA (144): 175-178.
- 青崎幸夫, 2010b. 沢原高原での石起こし・スキッピーティング採集. SATSUMA (144): 179.
- 今坂正一, 2009. 大野原で確認した昆虫類 - 長崎県 RDB の見直し調査の一環として -. こがねむし (75): 1-25.
- 福田輝彦, 2012. 沢原高原の蛾類採集記録. SATSUMA (148): 154-163.
- 長瀬博彦, 1982. 南九州の蜂-4-. 蜂友通信 (14): 57-78.
- 長利貴大・長利京美, 2012. フジジガバチを始良郡湧水町で 2011 年, 2012 年に採集. SATSUMA (148): 264.
- 山元宣征, 2011. 長崎本土の有剣ハチ類. つねきばち (19): 1-28.